

コメント

1 日本哲学会第73回大会・大会シンポジウム「未来という時間」の提題者3人の論文についての（私用の）メモ。以下主に、青山論文「時間は様相に先立つか」について2～19で、須藤論文「未来への態度」について20～35で、中島論文「超越論的仮象としての未来」について36～50でコメントする。

2 青山論文は、優れた直観を大きな構図のもとで提示してくれているので、読む側の思考を大いに刺激してくれる。私が刺激されて考えたことは、だいたい次のようなことである。

3 考察全体は、「様相と時間」や「ある（ありうる）となる（なりうる）」や「タイプとトークン」や「論理的可能性と実現可能性」等々の二項対立に基づいているが、「時間の動性と時制と様相」の三者関係を捉えるためには、その二項区分を維持するやり方ではうまく行かないのではないか。

4 「実現可能性（なりうる）が論理的可能性（ありうる）に先行する」は、「実現可能性（なりうる）から、時間の動性（なる）を引くことで、様相（ありうる）を理解する」とも言われる。しかし、時間固有の「なりうる」から、認識論的水準であっても、時間の動性（なる）を「引く」ことはできないのでは？

5 言い換えれば、時間推移（動性）の固有性を重視するならば、「なりうる」ことと「現になる」ことには、「引き算」できるような「差」は（むしろ）ないのではないか？

6 つまり、（論理的可能性でも物理的可能性でも能力でもない）実現可能性【＝時間固有の意味での実現可能性】は、現に実現すること【＝現実性】と区別はつけられないのでは？「時間推移（動性）」を重視するならば、可能性と現実性の違いは潰れるのでは？要するに、時間の流れ自体には、様相はないのでは？

7 様相と無縁の時間推移に、様相（ありうる）が入り込むのは、時間の流れに時制区分が持ち込まれることによってではないか。ただし、時制と様相も異なるが。様相（論理的可能性）は言語的・概念的な産物であるけれども、時制

(未来)は、様相なき現実(時間推移)と言語的な様相との「ハイブリッド」であろう。

8 「「今」が未来へと推移する」「この現在が全体として未来になる」は、上記の意味でのハイブリッド表現(時制区分+時間推移)であると思われる。両者はまた、それぞれを純化(独立化)する方向で考えることも可能であろう。

9 時制区分の仕方とは関係なく(あるいは時制区分を超えて)、時間はただただ推移するベタな連続でしかありえない、というのが時間推移の純化。「今」と「未来」のあいだを「なる」という生成関係で連続させるわけにはいかない(断絶の強調。ex.未来は決して今にならない)というのが時制区分(未来)の純化。

10 両者のハイブリッドにおいてのみ、過去・現在・未来を貫くりニアな連続が認められて、(タイプのではない)トークン的な個体が、過去向きにも未来向きにも、タイプに回収されない同一性を確保できる。つまり(論理的可能性ではない)実現可能性を持つ(かのようになる)。

11 しかし、もう一つの方向性(断絶の強調)では、むしろトークン的な個体(の同一性)を、未来向きに延長するわけにはいかない。未来にはトークン的な個体など、そもそも存在しないので。そこで、その個体の(タイプのな可能性ではない)「実現可能性」など、考えることさえできないことになる。

12 未来に向けて、タイプのな可能性を超えたトークン的な可能性を考えられるように思うのは、その未来がすでに過去化している(過去を、それよりさらに前の過去から考えている)からである。そして、その実現可能性(≠論理的可能性・物理的可能性等)は、すでに現実になっていること以上ではない【様相の潰れ】

13 時制を複合的に使うこと(過去を未来化、未来を過去化)もまた、現実のベタな時間推移を、言語的な装置によって馴致しようとしていること(ハイブリッド化)に相当する。それは、単なる概念的な操作ではないが、時間推移それ自体でもない。

1 4 「実現」と「可能性」が（実現可能性として）一つになるのは、現実と概念（言語）のハイブリッドの産物。未来という時制に注目するならば、むしろ「可能性」ではなく「不可能性」を「未来」に割り当ててもいいのではないか（未来は決して実現しない時）。

1 5 未来に固有の意味での「実現可能性」などほんとうは無くて、可能性は論理的可能性や物理的可能性などから持ち込まれた可能性でしかなく（可能性自体が言語的産物あるいは言語的ハイブリッド）、未来固有の様相としては、不可能性が残るのではないか。

1 6 次のようにも言える。「或る全体が別の全体になる」という表現には、二つの相容れないことが同居しており、そのことこそが時間にとって本質的である。つまり、「になる」ためには「別の全体」ではありえなくなり（ただ一つの全体になってしまうから）、「別の全体」であるためには、「になる」では繋げないのではなければならない。

1 7 青山と同様に、私も「時間は様相に先立つ」と考えるが、端的にそう言えるのは、時間推移に対してであって、時制的な時間（過去・現在・未来）に対してではない。むしろ時制は、時間（現実）と様相（言語）の媒介者であり、両ベクトルの和であって、様相に先立つものと様相への依存との混合である。

1 8 以上のような三者関係の観点から見直した場合には、青山論文の中に登場する「選択」が、その働き・有効性を失うように見える。つまり、「なる」や時間の優位を主張する論の中には、「選択」が力を発揮する余地は消えると思う。もちろん、その「余計な」選択とは、「世界の選択」であるけれども。

1 9 1 1や1 3との関連で言うと、「なる（なりうる）」ことと「なりえた」ことは、同じ水準で扱うことはできない。後者には、過去の中で未来指向を使うという時制の複合化が含まれるし、さらに概念的な（非時間的な）可能性もそこに持ち込まれる。そこでは、後立つはずのものへ予め依存するという「循環」も生じる。

20 須藤論文（「未来への態度」）は、その前半が「表象的な水準の考察」で、後半（3以降）が「表象以前の（あるいは超表象的）な水準の考察」になっている。「未来への態度」は、その水準の異なりに応じて、異なったものになるだけでなく、さらに「相容れない」態度になるのではないか。

21 その前半部から導かれる「未来への態度」は、次のようなものである。未来が単なる表象にとどまらず、（過去との繋がりに支えられながら）実質化し（未来の過去化とも言われる）、手応えのある現実感を備えることによって、未来は生の方向性を示す。cf. p.31

22 一方、その後半部から導かれるのは、むしろ「未来への態度」の失効ではないだろうか。というのも、表象以前の未来（「あるだろう」としてあるにまかせる未来）とは、「いかなる場合にも現在化しない時としての未来」（p.35）であり、その到来不可能性は態度を取ることで自体を挫くからである。

23 「未来への態度」は、前者ではポジティブに立ち上がり、後者で不可能なものとして挫かれる。この矛盾的な事態を、私はむしろ積極的に受容し、（青山論文のコメントの中で）「ハイブリッド」と呼んだ。つまり、両方向の相容れないものの同居こそが、「未来」という時間を構成していると考えたい。

24 「未来の過去化」「過去の未来化」という表現が、須藤論文には見られるが、どちらも複合時制的な意味ではない。時制のシステムには、あらかじめ複合時制を可能にするような「時制的視点の移動」が組み込まれていると思うが、（青山論文でもそうだが）この観点がなぜか登場しない。

25 須藤論文には、表象以前の（あるいは超表象的な）水準の考察において、「時間的な病態」とでも呼ぶべきものが登場する。アンネの症例においては、（個々の過去事象ではない）総体としての過去（枠組や地）に関わる自己疎外の危機が問題になっている。

26 そのアンネの症例において、pp.32-33 の記述では、総体的な連続性の欠如が病態であるように書かれているのに対して、p.34 ではむしろ、「総体として

の過去」それ自体が「亡霊」となって回帰してしまうこと、つまり背景に沈んでいるべきものが図化することに、自己疎外の病態を見出している。両者は、「連続と断絶」の両者のバランスのとれた「背景（地）」というあり方が崩れている（バランスを失う）という意味で、同一のこと見なされているのだろうか。

27 過去（図化されない地としての、連続かつ放擲される過去）の方向においては、そのようなバランスのとれた統一を「連続と断絶」のあいだに仮に見いだせるとしても、未来方向には、そのように「バランスのとれた統一」は、そもそも不可能なのではないか。

28 というのも、表象化・実質化された未来と、決して現在化しない未来（やってくることの不可能な未来）とは、前者の連続と後者の断絶のあいだの「断絶（非連続）」だからである。過去のように、総体的な連続の中で、放擲や忘却や断絶が可能になっているのとは違い、その断絶は連続性に回収されないことを本質としているからである。

29 須藤の「決して現在化しない未来」と中島の「ただ端的に無いものとしての未来」は、どう違うのだろうか？また、須藤の観点から中島の「ただ端的に無いものとしての未来」論を見たときに、それは「時間の病態」あるいは「失調」（p.39 下段 L.2）として記述されるのだろうか？

30 青山・須藤・中島の三者を比較した場合、須藤と中島は、相互に違いはあるにしてもそれぞれに、未来における「無」の側面、あるいは様相的には不可能性の側面（と私だったら呼びたい）点が重要な役割を果たしている。一方、青山においては、未来の様相はあくまで「可能性」であり、未来の「無」の側面は扱われていないように見えるが、この違いは何を意味するのか？

31 一方、青山・須藤に共通に見ることができ、中島では強調されていない点が、「時間の動性それ自体」（青山）や「赤裸々な時の過ぎ行き、完璧な生成、絶対的な生成」（須藤）である。ただし、須藤は、絶対的な生成へ晒されることについても（過去や未来の場合に加えて？）、症例（ゲープザッテルの症例）との関連を考えているが、青山の「動性」には病態論的な傾きはない。

3 2 須藤は、p.38 において、「過ぎ行き」「絶対的生成」と「未来」とを結びつけて、「こうして、絶対的生成というか、時間の間断なき推移こそが、未来のエレメントであることが明らかとなる」と述べている。しかし、そこで結びつく「未来」は、「いまだ来たらずとして留まる未来」であって、それと「決して到来しない未来」とは、異なるのではないか？

3 3 前者は、(失調的ではあれ) 時間推移と関わっているが、後者は、そもそも時間推移が及び得ない「無」だからこそ、「決して現在化しない」のではないか？中島も指摘するように、「まだ無い」のではなく「ただ端的に無い」ことが後者の不可能性の中心ではないか？

3 4 須藤論文の最後の方で、曖昧で不安定な「準-実在」としての未来を、「実在」や「非在」に同一化することで、その曖昧さや不安定さを取り除こうとする「症例」について語っている。前者は「運命の先取り」であり、後者はゲープザッテルの症例である。

3 5 しかしむしろ、その両方向(実在と非在)のあいだのブレ自体が、未来という矛盾的なあり方を構成しているのではないか。つまり、時間や時制に関しては、「病態」的なあり方こそがむしろ時間の真実そのものなのではないか。

3 6 中島論文の1で、未来に関して、「まだない」と単に「ない」だけを区別していることは極めて重要であると思う。中島と「逆向き」の関心になるが、端的な「ない」に対して、どうして「まだ」が加わってしまうのかは、未来について考える場合に、とても重要だと思うからである。

3 7 中島が強調する未来に関しての「単にない」は、「何ごとも現に生じないこと」であり、「次の未来が、(未知なのではなくて) ありとあらゆる意味で到来しないかもしれない」ことである。あくまでも「次の新たな未来」こそが問題であって、これまでに実現してきた未来ではない。

3 8 しかし、そのような端的な「無」の可能性を強調した未来に関してであっても、「まだない」が本質的に過去形を含む(「まだなかった(が今は実現し

ている)」を経由する) ことと同様の事態が起こるのではないか。つまり、端的な「無」の可能性があったはずの未来が、なぜだか訪れていることを經由してしか、そうは言えない。言い換えれば、「端的な無の可能性」は、決して実現しないこと(不可能性)によってその可能性が担保されているような、独特の「可能性」なのである。

38 その未来の独特のあり方は、須藤論文における「けっして現在化しない未来」とも通じる点があると思われるが、様相の問題としては、未来は「不可能性」という独自の様相を含むことを示唆している。

39 上記のような事態を裏支えしているのが、(時制とは無縁のベタな)時間の推移(cf.青山「時間の動性」)であろう。「未来は(現在の心の状態ではなく)未来における世界の状態」と言える際には、その「世界の状態」と独立に「時間の推移」が暗に使われている。「世界の状態」自体は、たとえ「無」であっても(の可能性があっても)、それとは独立に時間は推移する、というように。

40 中島論文の2で言われる、「現在次の音が何であるかは、まったく開かれており、単なる「無」である」や、その注における「(無規定の)完全な無」は、1で述べられた「何ものも到来しない無としての未来」の「無」とはたして同じだろうか？

41 前者は、(ドーナツの例でも分かるように)必ずしも時間に特化された「無」ではないが、後者はまさに時間に本質的な「無」である。その違いを考えると、どうしても、後者には「時間推移(時間の動性)」が入り込んで来ることになるのではないか。中島が多用する「常に新たに湧き出す時」という表現は、実はこの次元(時制とは無関係の時間推移の次元)に位置するのではないか。

42 中島論文の3では、「意味がまだ固定していない(意味を固定しつつある)時」が「現在」であり、「現在」は「常に新たに湧き出す現実」として考えられている。一方、「いま」は意味現象としての収縮自在性を持つ表現として考えられている。

4 3 前者は固定がどこまでも完了不可能であることを、後者はむしろ固定のとりあえずの完了を強調していて、「現在」と「いま」は、別のこと（別の側面）なのでは？現実としての「現在」というあり方と意味・言葉としての「いま」は、むしろ相容れない要素を含んでいて、単純に同一視できないのではないか？

4 4 さらに、中島論文の4において「形式と質料」の観点が入り込まれ、「質料が刻々と新たに湧き出す」ことが、「刻々と湧き出す未来」とも言い換えられている。まず、その純粋に偶然に湧き出る質料を、「未来」と呼ぶことは、（中島の立論において）適切なのか？次に、この「絶えず進行する、質料としての時」という考え方は、4 3の「現在といまの相違」を裏書きするものではないか？

4 5 それ（新たに湧き出す時）は、「未来」ではなく、やはり「現在」なのではないか？その「刻々と湧き出す時」は、中島論文の2で述べられた、（A1）や（A2）の立場に出てくる「現在」に他ならないのでは？

4 6 そこに「未来」と呼ぶに相応しい点があれば、その「湧出」自体が、「まったくない（起こらない）」可能性によってであろう。そこで、未来は、「新たに湧き出す時」ではなくて、「新たに湧き出さないかもしれない時（もう時ですらないが）」という矛盾的なもの（時でないのに時のように言われるしかないもの）にならざるを得ないのではないか。

4 6 また、「刻々と湧き出す時」を「現在」だとすれば、それは、形式に捕捉されていない質料としての「現在」を考えていることに当たり、まさに、「意味がまだ固定していない（意味を固定しつつある）時」としての現在に相応しい。（意味＝形式なのだから）。ということは、意味現象としての「いま」という言葉とは異なる次元で、「現在」が働いていることになる。

4 7 なお、中島論文の4における「質料重視」は、青山論文における「トークン重視」と比較してみることは有効かもしれない。その比較は、中島における（未来に関わる）絶対的な偶然性や差異の強調と、青山における「或る全体から別の全体になる」という事態を比較することにも通じるだろう。

48 中島論文の5においてまとめられているように、中島は「未来」を、本来的に「ない」にも関わらず、「ある」かのように思いなす錯覚として捉えている。しかしもう一歩進めて(?)、その二要因(本来と錯覚)は、単に対立・共立しているだけでなく、本質的に「絡んで」いるのではないか?

49 未来の「ない」ことは「ある」ことへと依存せざるを得ないと同時に、未来の「ない」ことは「ある」ことへと依存してはならない、というように。ここには、未来という時特有の「矛盾」があるのではないか。

50 したがって、「見破る」(と中島論文の最後で言われる事態)とは、単に一方(錯覚)を捨て、他方(「ない」の自覚)に至ることではなく、むしろ上記の「矛盾」自体が生じないこと(未来という時そのものの解消?)であると思われる。